草刈り・水路掃除の主力は非農家！

（16人）（4人）地権者と耕作者の「農業お助け隊」発進

宮津市須津地区
推進委員が提案

宮津市須津地区では、地元の非農家（地権者）が主力メンバーの「農業お助け隊」が発足し、獣害防止柵や水路の維持・管理作業に大活躍している。主な活動範囲は、中山間集落協定や多面的機能支払の対象エリア（水田約21㌶）で、耕作者の高齢化や減少に伴い困難になった作業を担当。2月の水路掃除と除草を手始めに、5月7～8日には最大の懸案だった法面の一斉除草を実施した。特に、山際の獣害防止柵付近は3年ぶりの草刈りで、〝美しい田園風景〟が復活した。

現在、「農業お助け隊」のメンバーは20人で、うち16人が地元の非農家（所有する水田を耕作者に預けた農家組合員）だ。今年1月、農地利用最適化推進委員で農家組合長の糸井久和さんが「ふるさとの景観を守り、地域の農業を維持するため、農地保全活動に参加してほしい」と幅広く協力を募ったところ、地元の自治会長や市議会議員、民生・児童委員を含む20人が趣旨に賛同し、「農業お助け隊」が発足。今年から共同作業の実働部隊となり、耕作者と地権者が協力して草刈りなどに取り組む体制が整った。





㊤法面の草刈りに奮闘した「農業お助け隊」メンバー（5月8日、糸井委員は最後列（3列目）左側の白い帽子の方）。㊧獣害防止柵付近の草刈りは大変！

活動の予定は、年5回程度で、6月は防護柵の点検、8月は草刈りを行う。「農業お助け隊」の発起人で名付け親の糸井委員は「活動に参加された皆さんから勇気と活力をもらった。感謝の気持ちでいっぱいです」と話している。

宮津市では、高齢農家のリタイアなどで耕作者が減少し、地域農業を維持するために、〝地権者と耕作者が協力して農業用施設を保全管理する仕組み〟が不可欠となっている。

そこで、宮津市農業委員会は、24人の委員が市内の全75集落で「農家組合長や担い手との話し合い」を精力的に展開。地権者と耕作者による農地管理協議会（利用調整組織）の検討や若手移住者の農業新規参入など、市内各地で新たな取り組みが広がっている。

遊休農地を「地域おこし」に活用！　井手町

井手町まちづくり協議会（町内の12団体で組織）は、井手町まちづくりセンター椿坂を拠点に、椿坂ふれあい市の開催、河津桜の植樹、各種イベント（時代絵巻行列など）の企画運営に取り組んでいる。

最近、交流拠点の椿坂周辺で遊休農地が増えているため、協議会で遊休農地を再生利用する活動を開始。協議会メンバーの農業者と地域おこし協力隊（2人）が中心となり、再生した農地（13㌃）でエビイモ、アカミズナなどの野菜の栽培に取り組んできた。

今後は、2023年度（令和5）に開業予定の「道の駅」で特産品として販売するため、果樹や花きの栽培も検討中。農業振興による地域活性化をめざす活動に力を入れる計画だ。（井手町農業委員会）



地域おこし協力隊員がタマネギを収穫

情報発信力向上セミナー　参加者を募集中！

京都府農業会議は、販売力強化やネットビジネスで売り上げアップをめざす農家を対象に、「情報発信力向上セミナー」を開催する。初回はPOPや接客、SNSなどに活用できるコピーライティングの基本を学ぶ共通講座を7月15日（木）に南丹市国際交流会館で開催。その後、ホームページ作成、SNSのビジネス活用、ECサイト作成、コンテンツ作りのポイントなどテーマ別に選択講座を予定している。

参加は無料。申し込み締め切りは7月9日。詳しい問い合わせは、京都府農業会議（☎075・417・6888）まで。

コウノトリと共生する特栽米プロジェクト始まる

やぎ地立計画×ユートピア室橋　南丹市八木町

南丹市八木町の若い女性中心の活動組織「やぎ地立計画」が、地元の農業法人（有）ユートピア室橋（室橋）の協力を得て、今年から「コウノトリの暮らせる田づくりプロジェクト」を始めた。

プロジェクト代表の用澤菜子さん（26）は、共に地元で育った西村薫さん（31）や、大阪府から移住した柴田茜さん（34）他とともに、3年前から休耕田を借りて月1回の農作業イベントを開催。SNSで呼びかけ、京都市や大阪府内から集う若者たちに「農が近くにある田舎暮らしの魅力を伝える活動」を続けている。



農作業イベントを参加者と楽しむ用澤さん（右端）



巣塔にとまるコウノトリ

今回のプロジェクトでは、一昨年から飛来するコウノトリのために建てた巣塔に隣接する60㌃の田で特別栽培米のキヌヒカリを育てる。農作業体験の企画、除草作業と米の販売を「やぎ地立計画」が担当し、水田の管理はユートピア室橋が担当する。

用澤さんは「地元農家の賛同が得られたので、これまでの活動で得られた人脈をもとに販売ルートを作り、地域の発展のために活動していきたい」と語る。

現在、1口3万円で特栽米と農作業体験（または梅干し、味噌などの加工品を選べる）をセットで販売。賛同者を募っている。詳しくはこちらの二次元コードから。

京都　京都府支局　京都府農業会議

京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2
府庁西別館内
075・441・3660

農deきらきら

南丹市　山本　善久さん

新規就農でイチゴに挑戦！

南丹市八木町諸畑地区でイチゴ栽培を始めた山本善久さん（50）。京丹波町内の農業法人で野菜の栽培を約10年経験した後、若い頃から夢だった独立を決意し、綾部市のイチゴ農園から栽培技術の指導を受けて、昨年1月に就農した。

ハウス4棟（6600株）を家族（山本さん夫妻と両親）で経営する「やまもとberryふぁーむ」では、品種は酸味が少なく甘さが際立つ「章姫」を選び、12月から6月まで収穫。地元の南丹市と亀岡市内のスーパー、道の駅などで販売している。

顧客からの反応は上々で、口コミの評判で人気商品となっており、取扱店も徐々に増えている。（南丹市農業委員会・田村好司委員）



愛情込めてイチゴを育てる山本さん

筍を待つお客さんのために



筍を茹でるガス式回転窯と西村委員

つないで発信

女性委員が〝つないで発信〟

乙訓地域の伝統的な栽培方法「京都式軟化栽培法」で筍（タケノコ）を生産しています。

最近はIH（電磁調理器）のキッチンが増えて、大きい鍋を使うのが難しい家庭も多く、お客さまから「筍を茹でて売ってほしい」という声をよく聞きます。そのため、学校給食などで使うガス式の回転窯で、約80㌔の筍を同時に茹で、きれいにし、姫皮を残して注文いただいた方に売っています。

私が所属する「大山崎町いきいき朝市実行委員会」では、毎年「筍まつり」を開催し、多くのお客さまに筍の土佐煮を試食いただきますが、昨年と今年は新型コロナウイルスの影響で中止しました。おいしい筍を待っている方々のために、来年、新型コロナウイルスが終息したら復活したいと願っています。京都式軟化栽培法で栽培した筍の味を守っていこうと思います。（大山崎町農業委員会・西村淳子委員）